令和４年　第７回総務経済常任委員会会議録

令和４年４月１８日　議員控室

○事　件

協議事項

（１）　肉牛についての情報提供

○出席委員（６名）

委員長　安　藤　辰　行　君　　副委員長　牧　野　　仁　君

大久保　建　一　君　　関　口　正　博　君

宮　本　雅　晴　君　　三　澤　公　雄　君

○欠席委員（２名）

横　田　喜世志　君　　倉　地　清　子　君

○出席委員外議員（０名）

○出席説明員（０名）

○出席事務局職員

事務局長　三　澤　　聡　君　　事務局次長　成　田　真　介　君

〔開会　午前１０時５６分〕

◎　開会・委員長挨拶

○委員長（安藤辰行君）　それでは、時間ですので、総務経済常任委員会を開催したいと思います。開催にあたりまして私のほうから、前回の話ですけれども、勉強会という話も出たんですけれども、今回も前回と同じような肉牛についての情報提供ということで、会議を開きたいと思います。これからのことについては三澤さんのほうにお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

◎　協議事項

○委員長（安藤辰行君）　それでは早速協議事項に入っていきたいと思います。それでは情報提供ということで、よろしくお願いいたします。

○委員（三澤公雄君）　この間の勉強会のあと、すぐに皆さんの集まる日程が決まったものですから、ちょっと欲張っちゃって時間だけ取ってもらいました。それで、あまり欲張りすぎてもなと、後から思いまして、前回急遽お配りました読みづらい資料を目を通していただいて、今日は皆さんが何がわからないのかということが、まず僕が知る一番必要なことかなと。そういう意味で肉牛の経営というものだとか、肉牛に関してわからない、何がわからないのか、皆さんにとって何がわからないのか僕が把握する時間ということで、今日はちょっと使わせてもらえたらなと思いますので、是非、資料を見ても見なくても、今日は答弁もあまりしないようにして、わからないことを僕が持って帰るというかたちをちょっと考えたいと思っています。喋りたい口をグッと我慢して、耳だけに集中したいと思いますので、一つよろしくお願いいたします。

進行は、委員長のほうでお願いできますか。

○委員長（安藤辰行君）　はい。

今三澤さんのほうから、ありましたけれども、なんか質問ありますか。

○委員（牧野　仁君）　はい。

○委員長（安藤辰行君）　牧野委員。

○委員（牧野　仁君）　せっかくだから。経済の話になりますけれども、国内の需要・供給の話になるんですけれども、海外産と国内産の比率はどれくらいあるのか。そして北海道、牛乳、肉に対して、どれくらい視野を持っているのか。その辺ちょっと伺いたいと思います。

○委員（三澤公雄君）　承りました。ちょっとなるべく、そうやって聞き耳で。これはいわゆる輸入肉と競合する肉を作るということは視野に入れたいんです。場合によってはそういう肉も発生するかもしれませんが、黒毛和牛を取り組むうえでは輸出も視野に入れるブランド牛を、20 年前に白老地区が全く何もなかったところから白老のブランド、北海道でずば抜けた白老ブランド、自治体とＪＡが協力してやったんですけれども、そこまでを狙っていこうということで、今がそのタイミングだと思って、そして人材もいて、資源である優良な肉を生産する遺伝子を持った、その可能性を持った遺伝子も今あるということも十分に皆さんにわかるような勉強会にしたいと思っていますので、質問ありがとうございます。用意しておきます。

○委員長（安藤辰行君）　ほかに。

あの、前回さ、離農した農家さんの牛舎を使う話ししていましたよね。そのままでは使えないから直すって、その時点で、その箇所は、その場所にたくさん集めるのではなくて、要するに、ばらばらなのかと、何箇所もというかたちのほうが、かえってお金がかかるのかなというような感じは受けるんだけど。その辺どうだろう。

○委員（三澤公雄君）　この話をあえてしたのはですね、青年舎という名前を上げてしまったから、あぁいうふうに何十億も投資する事業だと思われないために喋ったんですよね。皆さんの知識の中にもあると思いますけれども、いわゆる松坂ブランドだとかを作ってきたのは、じいちゃんばあちゃんの、いわゆるブラッシングする、農家の庭先で３頭、４頭飼っているという。やっぱり良い肉作るには結局はあそこに行くという話です。ちょっと今、取り組もうとした人とディスカッションすると。

そうすると牛舎だけぽつんと残っているところが、もちろん下見して活用できるスペースと水回りとかがあれば、そこに優良遺伝子を持った肉牛が作れる若牛を預けて、点々とする働き手が、そのいくつかの牧場を回るということも可能な投資術というのが見えてきたものですから、そういう意味で施設に投資するということも限りなく少ないという意味で空き牛舎の活用という話を、先走ってしました。繰り返しますけれども、施設への投資も限りなく少なくして、今、取り組むメリットとしては、やる気のある人材が、なかなか素牛生産よりも先に行かないリスクがあるから冒険できないということを、青年舎なり町の後押しを受けたら、中心になる牛の買い取りだとか、建物の若干の改修を視野に入れても、数千万の投資でいくんじゃないかというところがあったものですから、わかってほしくて口走ったというところがあります。

段階に応じて、そういった議長からも言われた前回、組織はどうなるんだというところを話をするときには、そういった投資の話なんかが具体的になると思いますけれども、本当は前回の場合は、肉牛経営というのはどういうものかというところで話を済ませるつもりだったんですけれども、どんどんエスカレートして話しました。

○委員長（安藤辰行君）　ほかに。

○委員（関口正博君）　はい。

○委員長（安藤辰行君）　関口さん。

○委員（関口正博君）　前回、八雲では 27 戸の肉牛生産農家があるということでしたが、その三澤さんの思いは、もちろん他業種の自分でもよく理解できるんです。この 27 戸、一つの目標に向かって、まとまっている状態であるのか、たとえばその中でも俺は独自路線で、いろんな研究したいだとかそういう方もいると思うんですけれども、今この 27 戸の関係性、それはどうなんでしょう。

○委員（三澤公雄君）　実は、前回も喋ったときに、関口さんから 27 という言葉を絡めた質問を受けたときに、僕の説明が足りなかったなと思って言葉を費やしたかったんですけれども、27 戸全体で進もうというふうに考えてないんです。もちろん若い人もいたら高齢者もいて、十分俺は素牛生産でお客も捕まえているし市場評価も高いという人もいれば、勉強するのは煩わしいから今の経営で十分だという人もいます。将来の目標として先ほど言ったような、輸出も視野に入れた高級肉を今、作れるチャンスなので、その下地作り、遺伝

子を、さらに大事にして、掛け合わせの知識も持った人材を据えて、八雲の牛肉っていうブランドを作るまで行く、研修機能と、いわゆる遺伝子の生産をする、卵を生産するというところの核となる法人を作るということに、協力する人間と、全く関心のない人間って正直あるんです。

だから 27 戸全員で進むという誤解は、まず解かなければいけないなと。本当に少人数だけれども、リーダーとして、その青年舎の反省と言いましたけれども、一番は地域に貢献する。自分らだけで儲ければいいというのではなくて、この遺伝子を少なくとも八雲の 27 戸以上の肉牛農家以外、酪農生産する人達も、俺らの卵は供給して、有利な生産活動に繋げられるということを考えている人材がいたと。いるんだというところで、この構想が動き出したということを、もう一度、段階を追って誤解なく説明したいなと思っています。

○委員（関口正博君）　仮に道南で、さっき白老の話も出てたけれども、道南で肉牛の活動に積極的な自治体ってほかにあるのかと、この 27 戸の戸数のレベルって道南の渡島・檜山においては多いんですかね。肉牛生産。

○委員（三澤公雄君）　たとえば先ほど、白老ってブランドをあげましたけれども、最近、北海道でメキメキ頭角を現しているところで、ＪＡとうや湖というところで、本当に輸出も視野にした優秀な牛肉生産されているのは３戸なんです。３戸の組合員を中心にしてもちろん頭数規模は 600、700 ですけれども。

今回はいきなりそこまで、いわゆる青年舎みたいに多額の投資をして、大量の牛をすぐに導入してやっていくという意味ではなくて、今ある下地の持っている、優秀な肉牛になる可能性がある素牛を何頭かでも残して肥育に向けていって、データをより早く活用して、よりもっといい生産をしていくという、そういった動き出しに何とか支援できればなと考えていまして、道南では、実は一番大きなＪＡ新函館という農協はそっちに今、どちらかといったら地域任せで、函館の赤牛とか、函館地区で活蒙やってるんです。木古内の牛のキャラクターもいらっしゃるでしょ。あぁいったこととか八雲では北里八雲牛や、和牛に関しては新函館はちょっと関心が薄いのかなって。

一方で、15 日の新聞だったかな。松前町が肉牛の研修センターというものを立ち上げましたって。自治体が先ず今、産業がなにかテコ入れしなければということで、松前も視野に入れているのは多分同じような感じの、白老を目指しているんだと思いますけれども、一方でそういう動きもある。ちょっと答えになっているか、わからないけれども。

○委員（関口正博君）　最終的に、この今回の勉強会も含めて、我々も理解を深めるのが目的なのはよくわかるんですけれども、そういういろいろかかる、はっきりちょっと言葉悪くなるかもしれませんが、はっきり言ったら行政として支援してほしい。最終的には。そういうかたちに持っていきたいということですね。

○委員（三澤公雄君）　そうですね。そういうふうになるためにも、議員の理解がまずいると思って、青年舎のときもそういう感じで動いたんですけれども、僕自身も反省というか、そのときの構想の中には、実は青年舎の中で肉牛部門を立ち上げて、少なからず早めに動けるだろうと思っていたんですけれども、去年１年間見たときに、人材がいない中でやることの難しさということと、あと生産調整が今年から始まりましたので、あのとき進めていた人

間として、その心配を一切皆さんに言わない中で申し訳なかったと思うんですけれども、青年舎の収益の、蓄積のスピードがちょっと鈍るんですよね。
○委員（関口正博君）　予定どおりにはいかない。
○委員（三澤公雄君）　そして思いのほか充実して、大関の敷地内に建物を建てたので、肉牛を併設するだとか、だからあの場所でなんでもかんでもということができなくなったという意味で、次善の策を考えなければならないということは去年１年間いろいろ考えた中で、中心になってくれそうな人達とディスカッションしたときに、青年舎の傘の下には入るんだけれども、もっとお金のかからないやり方が見つけられないかと。だけどやっぱりスタートアップではなにがしかの支援というのは、牧場の、いわゆる牛の核になる素牛の、会社法人にするなら会社として買い上げるだとかという意味で、青年舎の資金がちょっとすぐにも出そうにない中では、もう一度畜産業に、スタートアップとして数千万の出資を町にお願いするかたちになりそうだという意味で、議会の勉強会をということを考えました。下心なんですけれども。
　それがいわゆる、この１年間、目まぐるしくサーモン事業の展開だとかある中で、僕もその議論の中でお金の進み、使われ方ということに非常に皆さんも関心を持っているので、肉牛の話をどうやって整理するかという意味では、いかに少ない金額でお金の動きをはっきりさせなくてはならないということで練ってきたことを、段階を追って皆さんにお話をしたほうが、誤解なくいくのかなと思って、勉強会を立ち上げなければなと思いました。
　個人に、たとえば肉牛だから、そこの生産だけ応援するというかたちだと、個人のいわゆる資産形成に応援するかたちになるので、絶対そういった投入方法はあり得ないのでだから青年舎の動きも見てもさ、最初は核となる上八雲の牧場の牛を 100 何頭買うってかたちだとか、土地は買えるものは買うけど、敷地なんかは買いましたよね。そういった投資の仕方として出資として入っていった。
　だからあれをある程度モデルにすると、スタートになる、肥育になっていく準備する牛を、核となる牛を選んで、会社法人名義で買い取るというかたちにはしないと、あとから俺の牛だなんて、元々の持ち主に主張されたらおかしくなるので、そういった過程で２千万、３千万の買取価格が発生するのかなって。それが出資というかたちになるのか、会社の作り方は不勉強ですけれども、財産の買い取りという意味では、そういった部分が発生するのかなと思っているのが、今の関口さんの答えになるのかなと思います。
○委員長（安藤辰行君）　前にね、町長がね、野田生の農家の田んぼ屋さん、そっちのほうに説明に来たんだけれども、要するにそれも青年舎として。青年舎として立ち上げというかそういう一つの●●して、それで青年舎が窓口みたいなかたちで、皆、共同して、野田生も５軒くらいしかないから、後継者も少ないんだ。その代でやめる人も２～３人いるから。そういう話もしに来てたんだけれども、実際には本決まりにはなってない。その田んぼを買うにしても。そういう補助金がらみで青年舎が頭に来てやれるという説明に来てた。だからそれは、これとまた別でしょ。だから青年舎が、今回も肉牛の牛舎も同じようなかたちで補助金が付いている。同じようなかたちでできるのかなと思ったりもしたんだけれども。
○委員（三澤公雄君）　米の場合はね、僕も応援側面からしたいなと思ってたけれども、あの方法でいっちゃったら、俺の土地はいい土地だだとか、土地の評価でごたごたしたみたい

で、だからそれを横目に見ながら、志のある人を場長を据えるうえで、最低限、その人の持っている後々その受精卵とかを、どんだりこんだりの血統で受精卵作っても何にもならないので、その遺伝財産を確保するという意味で、ほかの肥育農家にも誤解なく進めなければいけないってそれは技術論としてあるんですけれども。なぜあそこなんだと言われても、成績突きつければ、わかる部分もありますし。

大事なのは、地域のために自分の遺伝情報を活用してほしいという考えを持っている人か、そうでないかというのが、青年舎の反省としては一番なのかなと。ちょっと思っているので。実際に技術論になると、まだまだ難しいところはあると思うんですが、町がもう一度、畜産に出資するという考えを、議員の皆さんに共通理解として持ってもらわないと、先に進めるものも進められなくなるので、その役立つ勉強会になればなと思っています。

○委員（関口正博君）　すみません。

○委員（三澤公雄君）　はい。

○委員（関口正博君）　もちろんそれはそうだと思うんですけど、農業であっても、酪農と肉牛と、漁業もそう。いくらでも補助はほしいんですよ。それでさっきの能登谷さんと牧野さんの議論もそうなんだけれども、企業はお金をかけたいんだけれども、今はなかなかかけれない。給料上げたいけれども上げられないと。これは都会と地方の状況が違うので、その辺の理解でちょっと能登谷さんたち足りないと思うんだけれども。

こういうことやりたいから、行政でお金出してくださいとか、青年舎にはいろいろ紆余曲折あっても、満度にきっと求められるように投資って。町長が投資って言い方はしていないだろうけれども、やっぱり僕らにしてみたら一緒に見えてしまう。またもまたもって思えちゃう。もちろん尊いものってわかるんだけれども、ある程度、企業努力というものが入って、民間というものは。そこで伸るか反るかって、こんな言い方もここでは相応しくないかもしれないけれども、そういう勝負というのは常に民間ではどうしても農業とか漁業はそういう側面がちょっと薄いなって。やるなら自分で勝負しろって。なんでそこまで行政に頼らなければならないのかって言うのは僕は率直に感じる。

サーモン事業もそうで、自分で腹痛めなかったら一生懸命働かないでしょ。もちろん頑張っている人にはお金出してやりたいなって。俺だってお金いっぱいあったら、そういう人達にも投資してやりたいと思うけれども。でもいろんなところの整合性も考えたときに、なかなか、そういうわけにはいかないという判断は行政としては当然しなければならないだろうし、もちろん八雲牛なんてものがブランド化して有名になったら、それは町としても、これからいいこともないだろうし、その辺の見極めというものは、どこかしなければならないから。今の段階で、今の説明だけで、じゃあその部門にもお金出してあげましょうって俺はならない。だって青年舎があるんだから青年舎でやってくれよって。さっきの担保の話もそうだけれども、時代が変わって頭数制限しなければならないから利益が出ませんって、そんなのは逆に知ったこっちゃないもん。あんたたちの中でちゃんとやりなさいって、俺たちはここまであれして認めたんだって、というふうには思わさるかな。

漁業関係者からも青年舎に絡めて、いろいろ話は言われるんです。町でそしたら会社作ってくれって。何もかもそういう前例を作ったという部分では、これから大変だなという思いはいろいろあるんです。何もかも手を差し延べるのではなくて、これからは必要なときに必

要な分だけお金かけるというふうに、どこかでシフトしていかないと、なんか怖いなという部分もちょっとありますので。俺も言葉足らずで申し訳ないんだけれども、だから俺も漁業者には、残念ながら今こういうことだから、あまりいいことではないから、自分たちで頑張ろうっていう言い方しかできないもん。

○委員（三澤公雄君）　率直に言ってもらって、次回の勉強会ではそこのところをちょっと整理できる何かを見せなければいけないなと。

○委員（関口正博君）　ここには、これはいいものだよ。投資したほうがいいというものに関しては全然ＯＫだろうけれども、今の段階で青年舎の中でなんとかしてくれよって。

○委員（三澤公雄君）　そうですよね。たとえば僕が畑違いの僕から見ると、漁業ってなかなか漁協って組織が何でもやって、でも畜産の人間、世界に身を置いている自分としては、酪農ってまた難しい作業をやっている中では、酪農の人たちにとっては肉はまた別な生き物であり、別な産業という見方で、なかなか一緒にやって利益出してる、本当に一緒になるとうまく利益が出るんですよ。でもやっている人材も限られているので、それを教えることもなかなかないと。だから米なり肉なり酪農ってどうしても分野別に考えてしまってこういった提案をしようという発想になるんですけれども。要するに違う考えを持っている人達にもっと説得できる資料を作っていきたいと思います。ありがとうございます。

○委員（関口正博君）　本当に肉牛に関わる人達って平均年齢も若いんですよね。

○委員（三澤公雄君）　一生懸命やっている人達は若い人達が目につきますよね。でも 27 戸って、いわゆる長万部も入って新函館なので、取り組みだした 25、26 年の歴史からいくと、結構、古い人達のほうが多いですね。

○委員（関口正博君）　だから自分で要は古い牛舎を買ってやっている姿。

○委員（三澤公雄君）　いわゆる素牛生産で終わっているんです。それ以上、挑戦するリスクを取れないで、やる気があってもやっていない、やれない人。元々そんな挑戦したくないという人達も圧倒的に多い。今のままでいいじゃないかというのも圧倒的に多いんです。だけど今、産地を形成する、チャレンジするまち八雲と考えた場合に、遺伝子をもってやる気のある人材がいるなら何か後押しをしたほうがと、ちょっと思ったうえでの考え方で、ただ町が出資するということを安易に考えずに、もっとメリットを強調できる資料作りをしていきたいと思います。

○委員（関口正博君）　最初、三澤さんが白老牛が地元の農協と自治体の協力によって今の姿がって。

○委員（三澤公雄君）　あの当時は黒毛肉が北海道で作れると思っていなかった中で、道のいわゆる普及センターという農業を指導する組織も、だから道と自治体と地元ＪＡが本当に、周りから白い目で見られる中で、黒毛の肉牛をブランドまで一気に立ち上げたという。長い歴史ですけれども、最終的に最初から一貫生産目指して取り組んでいたという意味では、稀有な存在だったでしょうね。

○委員（関口正博君）　そういう取り組み自体はちょっとしてみたいなと思います。自治体の関わり方も含めて。

○委員（三澤公雄君）　読みづらい前回配った資料は、その流れが少しわかってもらえるかなと思って共進会に注目した記事を皆さんにお配りしたんです。５年後に、たとえば僕は否

定的ですけれども、札幌オリンピックをまた２回目呼ぼうとしている動きも、それを起爆剤にというような感じですよね。共進会というのも、八雲の酪農の歴史を置いても、第２回全国共進会で上位に入賞した種牛が生まれたということで、それが認知されたということで八雲に学ぼうという流れが出てきた。だから今、５年後の共進会に向けて、いろんな部門がある中で、一つの部門だけでも八雲が出品して上位に入ることがもし可能であれば、白老ブランドみたいなブランドを作るうえでは、スピードアップになるので、今目指すギリギリのチャンスかなという意味で。仕掛けるなら今。もし今を逃すならもっと長い目でということになるかもしれないということで思っていました。

○委員長（安藤辰行君）　ほかに。ありませんか。

○委員（三澤公雄君）　だいぶ皆さんのわからないことと、僕がもっと勉強して皆さんに説明できるようにしなければいけないことが何点もわかりましたので、次にいつになるかわかりませんけれども、早急に資料を用意して、吟味して皆さんと議論していきたいと思います。今日は積極的な発言を本当にありがとうございました。

○委員長（安藤辰行君）　これで終わってよろしいですか。来月の委員会には間に合うの。

○委員（三澤公雄君）　やっぱり定例であるときに、少しずつでも話ができればいいなと思うので、次の常任委員会のときには今以上の、今、質問あったことを説明できるかたちで用意したいと思います。よろしくお願いいたします。

○委員長（安藤辰行君）　今日はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

〔閉会　午前１１時２６分〕